

桜門体育学会平成29年度大会 特別講演

2020年の東京オリンピック・パラリンピックは日本に何をもたらすのか

講師 遠藤 幸一 日本大学 准教授

●プロフィール

日本大学文理学部体育学科卒業（1984年）後、日本大学大学院文学研究科教育学専攻博士後期課程を経て、1989年より日本大学商学部にて研究・教育活動を行っている。1998年からの1年間はアメリカで研究活動（スタンフォード大学客員研究員）を行う。現在、日本体操協会常務理事、オリンピック・世界体操競技選手権広報担当、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会（体操スポーツマネージャー）等も務める。1989年から、国際体操連盟（Fédération Internationale de Gymnastique）が策定する男子体操競技採点規則におけるイラスト作図を担当している。2015年には四半世紀にわたるその功績に対し、国際体操連盟から感謝状が贈呈された。体操競技を中心として、スポーツ・体育に関わる多くの研究業績（例えば、遠藤、2016）をもつ。主な研究テーマは、「スポーツ科学（体操競技）」「体操競技を中心としたスポーツ組織のマネジメント」等である。

皆さん、こんにちは。ただ今、ご紹介にあずかりました日本大学商学部で教員をやっています、それから2020年東京オリンピックの組織委員会内では、体操のスポーツマネージャーとして勤務をしています遠藤と申します。皆さんには、特に体育を含めた学会になりますので、とてもオリンピックは期待が高いものになっていると思います。一生に一度、来るか来ないかという形のオリンピックが、この東京に実際にもうあと2年半でやってくるということになりますが、今日は、今組織委員会に入って1年ちょっとになりますけれども、現時点で感じていることを皆さんにお伝えをしていきたいと思っています。

本題に入る前に、ちょっと私の自己紹介を含めてご紹介したいと思います。私の父は遠藤幸雄と申しまして、1937年に秋田に生まれた体操選手です。オリンピックで獲得したメダルが1960年ローマの大会から3つの大会に出場しまして金メダルを5つ、銀メダルを2つ獲得した選手になります。ですので、私自身は、生まれたときに既にオリンピックとは関わりを持っているという立場でした。

1960年、父が金メダルを体操の団体で初めて獲得して、その翌年に私が生まれることになります。私は生まれながらに、オリンピックにもう既に足を踏み入れている形なんですけれども、東京オリンピックのときは3歳ですので、その記憶は、一体何をしたのか一切

ありません。甲州街道にアベベの走りを見に行ったと親から聞きましたが覚えはありません。

それから体操の試合は、1960年にローマオリンピックの団体で金メダルを獲得したということで、非常に多くの期待がかけられたということになりますが、その非常に大きな期待の中で、うちの母親は、とても体操の会場で試合を見ることができないということで、団体と個人総合のとき、会場には行かなかったと言っていました。家でテレビを見ていたということでした。ただ種目別のときには、会場に足を運んだそうですが、自分はまったく覚えていません。その東京オリンピックで父は、日本人初めての個人総合の金メダル獲得ですとか、3つ金メダルを獲得したなど、国民的に注目を浴びたヒーローという形になるかと思いますがその記憶は、まったくありません。

次がメキシコオリンピックです。メキシコオリンピックは父親の出場する最後のオリンピックということで、3回目のオリンピックに出場して、団体の金メダル、それから跳馬で銀メダルを獲得したのですけれども、そのときもまったく私は記憶にありません。テレビを見た記憶もなくて、父親が体操選手だということがうっすら分かるような状況でした。

その1968年は、サッカーがオリンピックで銅メダルを獲得したという年になります。にわかにサッカーのブームが起りまして、少し離れてはいたのです

が、サッカースクールというのができました。今では白井健三選手ですとか内村航平選手は、両親が体操選手でジムを開いてそのジムで育っていたというような環境がありますが、当時は体操の教室なども普及していませんでしたし、学校のクラブ活動で普及しているような形でしたので、民間のクラブというものがあまりなかったのですが、その当時、東京教育センターというところができまして、サッカーのスクールが始まるということで、私自身は、自分から望んでというわけではなく、母親の勧めでサッカーを始めました。

サッカーを始めて、その後、ミュンヘンオリンピックがやってきます。ミュンヘンオリンピックでは、男子の体操が非常に大活躍をしまして、大きな成果を上げることになります。どこもそれに追随するような国がないようなぐらい、特に有名なのが月面宙返りという画期的な技も出まして、圧倒的な強さで日本が勝っているという状況でした。そのときに父はチームリーダーという形で表彰台には上がるのですが、実際にメダルを掛けてもらっていないシーンを見て、チームリーダーは損な役回りだなということを、思ったように記憶しています。

そして次のモントリオールのオリンピックのとき、私の大きな転機が生まれました。ちょうど私は中学3年生になったときなのですが、そのサッカースクールというのは、高校受験を控え、受験のために中学2年生でサッカースクールというのは辞めなければいけないという状況でした。それによりまして、私自身が、中学3年のときにはもう何もやっていないという状況で、父親は特に体操を勧めることはなかったのですが、日本代表の試合の入場チケットを2枚ほどいただきまして、写真撮影の好きな友達と一緒に会場に足を運びました。そのときにたまたま、私と同じ年の中学3年の女の子が日本代表になるという状況を見まして、非常に大きな印象を受けて、自分が中学3年から体操を始めてどうかということを両親に相談して、まあ、やりたいんだっただけということで体操を始めることになります。

モスクワのオリンピックのときに、私自身が日大の文理学部体育学科1年生で入学をするという形になります。入ったときには、みんなオリンピックを目指して、当時のコーチだった梶山先生とかを含めましてトップのアスリートが日本の代表で、さらには世界の

メダルを取るという選手たちが一緒に練習をするところで練習をさせてもらうという機会を得ました。ただモスクワはオリンピックをボイコットするという経験で、非常にその落胆を見ることもありました。オリンピックというのを非常に大きく身近に感じたのが、この1980年になるかと思います。

大学を卒業して大学院に進みまして、その年にロサンゼルスオリンピック、これが初めての海外に出るということを経験しまして、具志堅選手、森末選手の金メダルのシーンだとかを見ました。開会式も見ましたし、その他に陸上競技場での試合、あとバスケットか、いくつかの競技の観戦をして帰るという経験をしました。実際に自分が生で見たのは、記憶のない東京オリンピック、そしてこのロサンゼルスオリンピックが2回目の観戦経験ということになります。

ソウルオリンピック、1988年ですが、最も私自身、身近に感じたのが、今、体育学科にいらっしゃいます水島先生を含めまして、佐藤寿治選手、日大の学生、さらにその当時は清風高校の高校生でしたけれども、その後に日大に入ってくる西川先生を含めまして、3人の身近な選手がオリンピックに出場してメダルを獲得するシーン、これを見ていて体操に携わってきて非常によかったなということを、振り返って感じたことを記憶しています。

その1988年の後、また大きな転機がありまして、私自身が体操のルールブックのイラストを担当するという人づてで話がまわりました。これは特に僕は、絵心があったわけではないのですが、大学院のときに研究した研究論文の中で、そのイラストを描いてまして、遠藤君、イラストが上手だから国内の規定演技の絵を描いてくれないかというところがスタートになりまして絵を描き始めて、それが国際体操連盟の技術委員の方に、日本にこういう人がいるから、その人に絵を描いてもらおうということでルールブックのイラストを描くことになりました。

ルールブックのイラストについては、このようなものです。ちょっと小さくて見えにくいかもしれませんが、1つ1つのこま送りでイラストを描くという形の仕事を、1989年からやるようになりました。それによりまして、バルセロナオリンピックはルール改正の検討会議があり、それぞれの担当の種目の技術委員の方にスペインのバルセロナまで行って直接行って対

応するという経験をさせていただきました。その仕事の後、オリンピックの試合を見たので、それが3回目の生でオリンピックを見た経験になります。

アトランタ、シドニーでは、私自身は国際審判員の資格を持ち、審判部という部署に所属し、日本代表審判としては、2002年と2003年の世界選手権に出ることになりました。ただ審判員とともに、2003年からは広報の仕事をするようになりました。皆さんも多分、記憶があるとは思いますが、アテネオリンピックでは、逆転で団体優勝を日本男子チームが果たして、栄光の架け橋という形で出たと思うんですが、そのアテネオリンピックは現地には行っていないんですが、そのときに、どうして勝てたのだろう、どうして復活したのだと、2大会連続でメダルなしで終わっていた体操日本が金メダルを獲得した理由を解説する多くのテレビ出演というのが待っていました。

北京を終えて、次のロンドンオリンピック。審判の仕事は一切、アテネオリンピック後に辞めて広報の仕事を中心にやろうというので、広報の立場でロンドンオリンピックに参加することになりました。オリンピックでは、ホテルの確保が非常に難しく、たとえロンドンであっても、なかなか泊まるところが私自身も見つけられず、非常に宿泊費が高い状況でしたが、たまたま国際体操連盟のほうから、大会スタッフで1部屋貸し出しをしてくれる人がいるよというようなメールが回ってきて、それはちょうどいいということでスタッフの1部屋に泊まらしていただいて生活をしました。それで、よりオリンピックで暮らしている人たちの町のこととか、オリンピックのスタッフはどうなのか、それからオリンピックの大会というのはどういうふうに行われるのかということを、メディアの目線で経験することができました。

そして、記憶に新しいリオのオリンピックがありました。リオのオリンピックのときには、私自身はまだスポーツマネージャーになるということを夢にも思っていないんですが、大会が終了した後に、人事に問題が生じ、私の話が出てきました。理由はわかりませんが、私の描くイラストですとか、審判で築いた人脈ですとか、そういったことを含めて、国際体操連盟からも推薦をいただいて、2016年の10月からスポーツマネージャーという立場で仕事をするようになりました。

そして、2020年の東京オリンピック後、どういうふうになるのか分かりませんが、生まれもってオリンピックと関わり続けてきたわけですので、何とかこのスポーツマネージャーという仕事を全うしていきたいというのが、私自身の今の気持ちになっています。

実際に本題に入っていきたいと思うのですが、東京オリンピックを見据えたときに、やはり今みんなが知っているところから、どういった種目に注目が集まってくるのかが関心の高いところなんですが、ロンドンオリンピックでのまずメダルを獲得した競技種目を見ていきますと、このようになります。金メダルは7個です。当然のことながら前回、前々回の大会で、どのような競技成績を残したのか、それがどのように2020の東京オリンピックにつながっていくのかということを考えていきますと、国民の期待というのは、やはりメダルを獲得するスポーツ種目になるというふうに考えています。

リオのオリンピックのメダルを見ますと、金メダルが7個から12個、もうこれは確実に東京オリンピックで開催ということが決まりまして、非常に選手たちも大きなモチベーションを上げて、さらに指導者たちもそれを上げて、その成果につながったんじゃないかなと感じています。いずれにしても2大会連続で獲得しましたスポーツ種目は、確実にこの2020年、東京オリンピックでも非常に大きな注目を集めることになるかと思えます。

その中の1つに体操が入ってしまっていて、私は国民の皆さんが注目をするスポーツ種目のスポーツマネージャーという立場に立たせていただいていることに対しては、非常に感謝し、うれしい思いでいます。

具体的にもう運営の話に入っていくんですけども、体操には体操競技と、それから新体操とトランポリンがあります。オリンピックではこの3つの種目が行われていますが、実際に体操の種別を考えますと、この他にアクロ体操ですとかエアロビック、それから一般体操といわれまして、競技性のない体操の種別を行うことがあります。これらのスポーツ種目の中を感じていただくために、それぞれがどのような年にオリンピックの種目になっていったのかを見たものが、これです。

男子の体操については、第1回から行われ、第9回から女子の体操が行われるようになりました。見て分

かるとおり、新体操、個人が1984年、団体がアトランタから、そしてシドニーからトランポリンということで、3つの種別はあるんですけれども、最も古いのが体操競技になります。特に伝統を重んじられていて、IOCからも評価をされて、ただこのように、いろいろな種別が、どんどん時とともに変わって増えているということは、見て分かると思います。

いずれにしても、第1回からなくならずに体操というのは引き続き行われていまして、その体操の種別の中で2020年東京オリンピックを考えるにあたって、1964年の東京大会男子体操を映像で振り返ってみたいと思います。映像をよろしくお願いします。

(映像視聴)

ありがとうございます。1964年ということで、非常に前になりますけれども、今日お越しになっている木村先生ですとか、早田先生も、若い頃の映像が出ていましたけれども、確実にあのお客さんがいっぱいいる中で、みんなが注目をして、何となくほのぼのとしたアットホームな感じの大会が、僕自身は映像からは感じる事ができるんですけれども、そこで2020年の東京オリンピックはどうするべきなのかなということ、非常に深く感じさせていただいています。

父の獲得した個人総合の金メダルは、今、文理学部の記念館のほうに寄贈させていただいて、見ていない方はぜひ見ていただきたいと思うんですが、まったく記憶にない私ではありますが、このように映像で振り返って、どのような大会を2020でやるのかということ、を改めて深く感じるようになります。

体操競技というのは、非常に特徴的なスポーツ種目です。いろいろなスポーツ種目の中で分類をしますと、測定競技、判定競技、それから評定競技という3つの分野に分けることができます。陸上ですとか競泳は、確実にタイムが出てきて誰が1番なのかということが明確に機械で分かるようなスポーツ種目になります。一方で野球ですとか、柔道ですとか、ストライク、ボールの判定は人間が行ったり、アウト、セーフを判定したり、柔道の技がかかったのか、かかっていないのかということ、を判定するスポーツ種目に対して、評定競技、例えば体操というのは、人が100パーセント採点をして、その人がどのような点数になるのかということを決めるものになります。ですので、非常に審判員の主観的な要素が入るスポーツ種目になっ

ています。

先ほどの映像でもありましたとおり、絵に描いたように9.1という数字が出てくる。何となく、それはおかしいんじゃないかなということで、当時いろいろ物議を醸したということは聞いていますけれども、点数が出てしまえば、それは体操のルールですので、それは生涯変わらないという状況になっています。

ただ、体操はそういう特徴を持っていますので、見ていてすごいんですけれども、何となく自分ではまねができないという点、それからルールが複雑で、何であのような点数が出てくるのかが分かりづらい、勝敗が分かりづらいという点、この2つが体操競技にとっては非常に大きなネックになっています。体操というものが、そういう宿命を背負いながらも第1回大会から今まで、それから2020の東京大会でも、正式種目として行われますが、体操というのは、ただ単純に残ってきたわけではなくて大きな変貌を遂げています。

まずは、先ほどの映像の1964年ごろは、男子であれば6種目、女子であれば4種目すべての種目の演技をすることがルール化されていました。ただその後どうしても、体操の技術を磨いて高めていく国が限定されていて、1種目だけ練習すれば十分に他の国にもメダルの可能性があるという、いろいろな国から声が上がって、スペシャリスト、1種目だけでも認めましょうという方向に動いていきました。

さらに規定演技というものが1996年を最後に廃止されることになります。われわれ専門家からすれば、同じ動作を比較して、どっちがうまいか下手かという判定はとても分かりやすいんですけれども、みんなが同じ演技を繰り返しやるので、どうしてもそれは退屈だということで廃止になりました。

10点満点が廃止されることになりました。これは、一番引き金になったのが、アテネオリンピックです。0.1の誤審によって、金メダリストが銅メダリストになってしまうという事件が起きました。これに対して非常にメディアが批判しました。0.1で大きく順位が変わるという状況が生まれてしまったのはルールのせいだとされ、じゃあ10点満点を廃止しようということになりました。

さらに団体の人数を減らすことになります。東京オリンピック当初は6人の選手が行い、団体総合は6人のうちの5人の上位の点数を合計して団体総合という

のを競い合いましたが、それが6人から5人に変えたのが、2012年ロンドンオリンピックです。それから今度の2020年の東京大会からは、5人から4人に減らし、人数の縮小、団体の縮小というのがルール化されました。なぜ、このように団体の人数が減るのかといいますと、多くの国に体操でオリンピックに出場するという機会の提供、そして新体操ですとかトランポリンという新しい種目を加えるにあたり、人数はこのまま増やさないというIOCの意向がありまして、縮小するということになりました。

このような大きな変更は、国際連盟の意向だけでなく、IOCですとか、テレビ局からの要望によっても、変貌する場合もあります。ただ、変わっていかねば、オリンピック種目として生き残っていけないかもしれないので、IOCやそれぞれの国際連盟が、お互いに駆け引きをしながら変えていくという状況が、今、置かれている状況になります。

体操はといいますと、このように変貌を遂げまして、IOCのランキングでは、陸上、水泳、体操、この3つの種別はAランクに位置付けられています。一方でBランクに位置付けられているもの、サッカーですとかバスケットボール、自転車、テニス、バレーボール、こうした種目は、どちらかという体操、陸上、水泳よりも下のランクでオリンピックの競技の中ではランク付けされています。

ところが一般の社会を見てみますと、これは通常のスポーツのコンサルタントがランキングを付けた、現在の国際体操連盟の渡辺守成会長が評価している情報を集めたものなのですから、体操については現在のところ24位、1位がサッカーです。特に愛好者の数が35億、それから24位の体操が5,000万ということで、まずは競技人口が大幅に違うという点、加盟国も違うという点、それから予算規模も、サッカーが1,480億円に対して体操が18億円という形で大幅に違っている。

このようにポピュラーであるかないかということを一般に考えますと、体操というのは、オリンピックでは評価が非常に高いのですが、全体的なスポーツ界、普通の一般の社会にとっては非常に低いということになっています。体操の良さとかは、体操を経験していて私自身もよく分かっているのですが、国際体操連盟の渡辺会長も、この24位という順位をどのよ

うに上げていくかということを課題に、会長に当選をしたということがありますので、私自身もオリンピックと体操は切っても切り離せない状況ですので、何かできないかということも当然、頭の中に置いて考えを巡らせています。

そこで私自身のスポーツマネージャーの役割なのですが、すけれども、この体操というスポーツは体操、新体操、トランポリン、3つの種別がありますけれども、その種別を何とか2020年、東京オリンピックで成功させるために、その準備、企画、それから実際に大会が始まった運営、運営を終わった後に、次のスポーツマネージャーにどのようにバトンタッチをしていくのか、まとめを行うという役割になります。

1年間、私自身がこのスポーツマネージャーとして取り組んできて感じたことを、今からお伝えしていきたいと思います。

まず1つ目が、オリンピックとなりますと、とにかく多くのスポーツがあるということ、多くの種目があるということを非常に実感しています。組織委員会の組織図を示したもののなのですが、森会長が組織委員会の会長として、非常にコンパクトなメッセージをいろいろな人に配信してもらっていますけれども、武藤事務総長他、このような形のスタッフで対応をしまして、スポーツマネージャーというのは、このスポーツ局というところに配属されている部署になります。このスポーツ局の局長が、ハンマー投げの金メダリストの室伏さんになりますけれども、この組織の中で、すべての多くの種目を対応するということになっています。

じゃあ東京オリンピックで、どのスポーツ種目がやられるのかといいますと、この33競技ということになります。今回、新たに加わったのが、スケートボード、それから野球ソフトボール、空手、スポーツクライミング、サーフィンという5つの競技になりますが、私自身、組織委員会の一員でありながら、毎日すぐに33競技を途切れなしに言えるかというと、そんなことはありません。さらに33競技のスポーツマネージャーがいますけれども、誰がどのスポーツ種目なのかということも、まだじっくりと分かっていないという状況です。さらにパラの競技も22競技ということで、前回大会のリオよりも2競技、バドミントンとテコンドーですね、こちらがパラのスポーツとして

加わることになりました。

このように非常に多くのスポーツ種目があるということで、組織委員会で働いていますけれども、もうあとわずか残りの時間で、本当にオリンピックというものを全体的に考えていけるのかなと思ったら、とても現状ではもう体操で責任を負うのでいっぱいいっぱいになっていまして、他のところまで目配りができないというのが現状です。

2つ目の感じたことは、パラリンピックについてです。それまで僕自身は、国内でパラリンピックの試合を見にいったことがありませんでした。ただスポーツマネージャーになりまして、初めて私たちの、今建築中なのですけれども、有明体操競技場というところで行われているオリンピックが終わった後のパラリンピックは、ボッチャがそのスポーツをやるということが決まっていまして、そのボッチャのスポーツマネージャーと非常にいろいろ話す機会がありまして、国内で国際大会があるからということで、その大会を見に行くことができました。

ボッチャというのも皆さん、知らない人も多いと思いますが、カーリングのように的があって、そこにどれだけ近付けられるのかということを競うものなのですけれども、特にパラリンピックの中でも非常に障がい度の高い人たちが行うスポーツ種目になっています。これらなんかも私自身がペーパーで見ることはあっても、それを実際に生で見るという行動まで起こさなかったのですが、スポーツマネージャーになることによって、ましてや同じ会場でやるパラスポーツということになりまして、実際に足を運ぶことができました。

足を運ぶというきっかけになったのは、とにかく組織委員会内で行われる全体会議というのが月に1~2度行われるのですが、その際、話に出るのが、どうしてもオリンピック中心になります。オリンピックのほうが先に行われますし、当然なのですけれども、毎回、パラはどうかなのかということで、パラのスポーツマネージャーのほうから質問が出ますと、それは次に考えますという話になります。機会は確かにオリンピックが先で、その後、パラリンピックが行われてはいるのですが、どうしてもパラのほうで、組織委員会内でもちょっと温度差があるのじゃないかなということを感じて、やっぱりまずは自分自身で足

を運んで、パラのスポーツを知るということが大事だなということを感じさせていただきました。

実際にパラの競技を見させていただいて、当然、入場料等はただではありますけれども、お客さんの客層ですとか、実際の競技運営とか、どのような形の配慮が必要なのかということをおッチャのスポーツマネージャーなどに説明を受けて、ああ、このような視点でやるんだということを感じることで、私自身も、パラはどうしたらいいのかな、パラをどうやってこの先、生かしていいのかなということを感じることができました。

おとといの会議でちょっと話を聞いたのですが、オリンピックがやはり注目を集めて、放送局が入って、放送局が非常に莫大なお金をかけてオリンピックをサポートしていますので、当然、お金も出すけれども口をすごく挟んできます。一方、パラについては、スポンサーボードを立てたりとかビジネス営業の機会がありますし、放送のほうもお金を出さない分、あまり口も出さないというようなスタンスで動くということを知りました。このように実際にオリンピック・パラリンピックという組織委員会の中で、体操は残念ながらパラリンピックという種別がありませんので、私の契約はオリンピックで終了となるのですけれども、今回の機会でも、まったく自分の中にはあまりなかったパラリンピックをどういうふうに生かそうかということの考えが芽生えました。

3つ目として、多くの種目があるということでの運営の難しさというものも感じました。私は2011年の世界体操競技選手権というのを東京で開催したときの組織委員会にも入っていたのですが、通常であれば体操だけですので、実行委員長がいて、その人を取り巻くいろいろな役割の人たちをこのような形で集めて1つのチームにして行えば、それで大会は成功を収めることができました。

一方で、これをスポーツ種目33、パラで22、それぞれの競技が行いますと、その足並み調整を誰がとるのかということが非常に大きな問題になりますので、現在、縦割りの状況でやっています。それぞれの部署が、どういう問題があるのかということをして、いろいろなスポーツ種目で検証していったほうが非常に効率化が図れるからです。ただ、これによりまして、いわば私が今、スポーツマネージャーという置かれている立

場は実行委員長なのですからけれども、どうしても目配りが行き届きません。それぞれでどこまで進捗しているのか知りたいのですがわからないため、それがなかなか自分で実感できない。これは多分、社会のいろいろな組織で同じような問題になっていて、組織が大きくなればなるほど抱える問題かと思いますが、それを非常に実感しております。組織が大きいと運営が難しいということです。

先日ようやく、会場のキックオフミーティングが行われました。今まで全体でやっていたものについては会場ごとに行うということになり、3つに大きく分かれることになりまして、体操は有明で行われますので、ベイゾーンというチームで行うことになりました。最初はコンパクトなオリンピックということで、すべて東京近郊でオリンピックを招致しましたが、実際に運営のことをいろいろと見直していくと、やはり他県も協力してもらわないとなかなか運営は難しいということになりまして、今、いろいろな県にも広がりを見せています。ただ、東京のオリンピックなのだからうちはお金を出さないなどという財政負担の問題がメディアに取り上げられて大きな問題になっていますが、組織としては非常に大きくて複雑で難しく、なかなか専門的に特化した形で動きづらかったのが、ようやく会場別になって、これから進んでいくのかなという感じを受けています。

4つ目、オリンピックブロードキャストサービスというところ、つまりテレビ局のことですが、そこからは強い要望が出てきます。これは、この間、妥協してしまった、私の提案した体操の試合日程なのですから、過去大会のものがルーティン化されていて、現在では開会式が終わった翌日から予選が行われて、男子予選、女子の予選を次の日にやって、その後が男子団体決勝、次の日に女子の団体決勝、そして男子の個人総合、女子の個人総合、それで2日間、トランポリンの試合をやった後に種目別決勝という形で、この2年間行われてきました。あまりにも、これでは、男子全6種目をやる選手が、1日おきで競技をしなければいけないということで、6種目やって1日休んで6種目やって、その後にトランポリンの競技を入れたら個人総合において最高のパフォーマンスが見られるのではないかと考えて提案することになりました。これは、まずは日本体操協会の理事会に提案をし

まして承認を得た上で、組織委員会に提案をしました。それについては、理事会のときは、日本体操協会はメディアに公開なので、翌日の新聞では、内村選手をかばうための方策で追い風なんじゃないかということで、ニュース記事になりました。これについては、ちょっと組織委員会内部でもまだ決まっていないことなので、こういうような記事になることは、できるだけないようにしてもらいたいということで注意を受けたのですけれども、その翌日です、内村選手がツイートでコメントをしてくれました。「予選、団体決勝、個人総合決勝と、この3つを6種目やったのは、過去4年で多分、世界では僕だけです。肉体と精神を最強に酷使します。フルマラソンしながらけん玉でミスらずに5日中、3日やれと言われたら嫌ですよ。それぐらい過酷なのです」というツイートをしてくれました。

私自身にもそれは追い風で、世界チャンピオンである内村選手がそのようなコメントを配信してくれたことを、国際体操連盟に理解を求めるためにお話をしたところ、もちろん、それはいいアイデアということは私たちも理解はしているということを書いていただきました。ただ、やはり放送局については、他のスポーツ種目との調整というものがあるから、こうじゃなきゃいけないという強引な形にはしないようにということを言われました。結果的に、オリンピックに対して最もお金をを出している放送局に対して、国際体操連盟の渡辺会長のほうから、なぜこの日程では駄目なのかという質問を出していただきました。残念ながら放送局からの回答は、土曜日に女子の個人総合の決勝をやるなんて絶対にやめてくれと。そこには、スーパーサタデーという考えが存在していました。毎回、オリンピックが始まる曜日はすでに決まっていて、開会式が金曜日に行われる日程で、ここ何回かの大会は進められています。いろいろな種目で、この中にある土曜日というものが決勝ですとか、目玉の競技が目玉押しになっていてスーパーサタデーと呼ばれ、体操が今まで、スーパーサタデーを避けてやってきてくれたおかげで、視聴率の部分で非常に大きな数字を取ることができるという内容でした。この回答に対しまして、これ以上は逆らえないだろうという話の結論を出しまして、結局、元の予定に戻して計画を進めようということになりました。

今、アメリカの4大プロスポーツといわれているものが、このようなタームで行われていまして、やはり空白の期間というのが7月、8月にあって、何でこの暑いときに東京でオリンピックをやらなければいけないのか、疑問に思っている方も多くいると思うのですが、これは非常に大きな力を持っているテレビの放送局の影響があるということを実感させていただきました。今後、このような事情とどう向き合っていくのかということが、われわれに課されている課題なのかなということを感じています。

最後になりますけれども、じゃあ東京オリンピックで何を残せるのかということを、私自身も考えています。基本的に今、東京オリンピックの組織委員会では、大会のビジョンというものを公開しております。ここには、こういうビジョンとかいうものは格好よく作るというのが一般的になっていて聞き流す人が多いと思うのですが、私自身は、このビジョンというものを、やはりぶれずに、そのままそれをどういうふうに変現したらいいのかということが大会成功につながりますし、大会の後のものにつながっていくのではないかなというふうに感じています。

3つの基本的なコンセプトが、その中に含まれていまして、まずは自己ベスト、全員が、という形がポイントになっています。私自身が一番やはり心配しているのが、選手がもちろんいい形でやるということなのですが、それを支える運営のスタッフ全員が、やっぱり自己ベスト、最高のもので対応しなければやはり成功というのがないのかなと。ただ、今の東京では人は多いですけども、なかなか横のつながりだとかがなく、隣の人も無関心というような状況ですので、どのような形でみんなが一生懸命、自分の最高を目指そうというふうになるのかなということが、鍵になっていくのかなというふうに感じています。

世界最高水準のテクノロジーを駆使する点について、本当に数年前、スマートフォンなんかなかったのですが、今、スマートフォンでとても便利な世の中になりました。多分、それを活用すると、とんでもなく便利な大会というのは運営できるのかなというふうに感じています。一方で、そういったものに依存してしましますと、いろいろな弊害も出てしまうのではないかなということを私自身は感じています。

ボランティアについてでこのボランティアの精神に

ついても、今、社会が非常に安定していますので、その中で、どのような形でボランティアを確保していくのか、これも私自身の大きな悩みになっています。やりたいと思っている人はいると思うのですが、いまだ、どのような形でボランティアを募集するのかということが、公開されていませんよね。私自身も、ボランティア集めはもう1月から準備を始めていまして、何とかやはり体操の競技の運営には体操の関係のボランティアを集めたほうが、効率がいいということは、分かっていますので、どのような形でそういう人たちを手に入れるのか。今のところ、そのボランティアというのは、すべて平等に一般に公開をして手に入れるという方針が組織委員会内に出ていまして、これはIOCも裏で適当にボランティアを集めるということがないようにということでは言われていまして、非常に情報公開をすることが難しい状況にあります。ただその中でも、うまくボランティアを集めて、そのボランティアがまたその先につながるような経験をさせてあげたいということを思っています。

多様性と調和。これについては、多くの国際的な世界中の人たちが、わずか16日間の大会、それからパラの大会、その決められた期間の中で集まってきますけれども、その中で、どれだけ東京に来た人たちに、日本の人たちが関わりを持つのか。声を大きく言いたいことは、日本人は、やはり会話を通じて、日本以外の海外の方と交流を取るとというのが、島国のために苦手な人が多い気がします。今、世界中の人がインターネットによって英語を使える人たちが一気に、世界中に広がりましたので、最低でも英語で交流が取れるというのは、これからの若い人たちはもう必須になっていると思います。それは今からでも、今この日からでも、しっかりとブラッシュアップをして、それが使えるような形に生かしていくことというのは、とても大事なんじゃないかなというふうに感じています。

未来への継承という形で、この先、今本当に考えている最中なのですが、具体的に今自分が一生懸命これは取り組めないのかなというふうに思っていることが、チケットの仕組みをオリンピックで作って、すべての種目を見るときには、同じ方法でチケットを買うような形の仕組みを作ります。ただ、それはもうオリ・パラが終わってしまえば使わなくなるのですけれ

ども、せっかくだったら、これからのスポーツを考えていけば、どのスポーツを見るにも同じ方法でチケットを取れるようになれば、もしかしたら他のスポーツ種目にも足を運ぶというようになるのじゃないかということを感じています。あるいは余分なコストがない種目については、アナログでまだチケット販売をしていたりというような競技団体もいるかもしれませんが、そういったところも、全部同じような形で効率を図っていけば、その先にまたつながって行って、スポーツ界の発展に寄与するのではないかなという考えを持っていたり。ただ、それを今、組織委員会内で検

討する部署がありませんので、私自身が1つのスポーツ、体操というのを責任持って運営する中で、ぜひそういったような、ちょっと別のアプローチを考えてやって実践ができるような形にもっていければというふうに考えています。

内容はほぼ私自身、こういう状況で進めています。多分これからも、まだまだ課題は生まれてくると思います。ただ、それらを解決し、ぜひ成功に向けては皆さんのいろいろな知恵があれば、お聞きしながら進めていければと思っています。

